

平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	管 28K02	氏 名	角田 毅
研究主題 —副主題—	病弱特別支援学校における教育的ニーズの把握と支援に関する一考察 —学習の参加と活動に焦点を当てて—		
派遣先	帝京大学教職大学院	担当教官	荒巻 恵子
所属校	都立武蔵台学園	校長	大井 靖

キーワード：教育的ニーズ、ICF、学習の参加と活動

1 主題設定の理由

2007年に文部科学省により「特別支援教育の推進について（通知）」が示され、学校においては、障害のある児童・生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、そのもてる力を高めていくことが求められている。そのため、日々の授業を更に充実させ、児童・生徒一人一人の自立や社会参加に向けた、主体的な取組への支援が必要とされている（文部科学省，2007）。

実際、児童・生徒の中には、病気による種々の制限により、体験が少なくなりがちなことから、自信がもちにくく、消極的になりやすい傾向が見受けられる（文部科学省，2009）。一方、指導上の課題として、障害や病気の状態の多様化から、児童・生徒一人一人に応じ、系統的な指導を行っていくことが指摘されている（文部科学省，2009）。しかし、教育的ニーズの把握と支援の方法は、必ずしも、明確にされてはいなかった（国立特別支援教育総合研究所，2016）。

これらの児童・生徒、教師の現状や課題の改善に迫るために、本研究では、児童・生徒に分かりやすく、教師にも指導しやすい支援の方法を追究することをねらいとして、研究主題を設定することとした。

2 研究の内容・研究の方法

(1) 基礎研究

各種文献から本研究における「教育的ニーズ」の文言について調べ定義する。また、障害のある児童・生徒の成長・発達に必要な支援について把握する。

(2) 調査研究

実践研究の一考察とすることを目的とし、教育的ニーズの把握と支援の現状を把握する。調査は、A病弱特別支援学校、担任教師29名を対象に質問紙法により実施する。内容は、以下のとおりである。

- ア 教育的ニーズの把握で重視したこと
- イ 教育的ニーズを捉える上での悩みや苦労
- ウ 本人や保護者、関係機関との話し合いについて
- エ 話し合いをしていない場合の理由
- オ 個別の教育支援計画の活用について

(3) 実践研究

ア 指導段階表の開発

基礎研究や調査研究等を踏まえ、後述する学習の参加と活動に焦点を当てた指導段階表を開発する。これは、生徒の現状に応じ、作成することが目指される。具体的に、本指導段階表は、「個別の教育支援計画の目標達成に伴い、個別指導計画の目標の再設定や指導内容の検討も行われる（上原，2009）」考えを取り入れ、以下に述べる授業実践に生かしていく。

イ A病弱特別支援学校での授業実践（全6時間）の概要

授業実践は、指導段階表に基づき設定された指導のねらいが達成されたかについて分析することを目的に、中学部第1学年準ずる課程に在籍する3名の全生徒を対象に技術・家庭科の技術分野で実施する。単元「アンデルセン（リサイクル）手芸をしよう」は、生徒が学習したことのある内容の一つでもある。

まず、授業観察は、例えば、観察対象のB生徒に着目し、学級担任等からの情報を参考に実施する。次に、この授業観察の結果を基に作成した指導段階表を学習過程に関連させ、実践的な授業改善を図る。

3 研究の結果

(1) 基礎研究

ア 教育的ニーズの定義

教育的ニーズとは、障害があることによって、遭遇する制約や、困難を改善・克服し、豊かな生活が送れるように、教育、医療、福祉、労働の分野から見た必要なものとしている（永田，2009）。

イ 国際生活機能分類（以下、「ICF」という）の視点を踏まえた学習の参加と活動

ICFでは、障害があることによって、遭遇する制約や困難を改善・克服することについて、生活機能という考えを提言している。具体的には、生活機能を心身機能・身体構造、活動、参加の双方性で示している。生活機能とは、人が生きること全体であり、生活機能が低い水準にあることを健康としている（西村，2011）。

ウ 障害のある児童・生徒の学習指導

授業とは、教師が一定の時間と場所の中で指導のねらいが達成するように、児童・生徒に働き掛ける行為である(太田, 1994)。そして、指導のねらいの適切さと、それを達成するための方法の妥当性を高めることである(太田, 1994)。また、働き掛けには、「興味や関心を喚起する」、「学習を促す」、「学習の状態を改善させる」の三つがある(阿部, 2008)。これには、言葉掛け、視覚情報、見本、教材、教具の提示、身体援助がある(阿部, 2008)。さらに、指導のねらいは、指導上、児童・生徒の具体的な実現状況を想定し作成すること(加木屋, 2004)、そして、評価はきめ細かに行うため一単位時間ごとに実施することが重要である(鈴木, 2004)、としている。

(2) 調査研究

本調査の中で、「個別の教育支援計画の活用について」の回答に着目した。「教育的ニーズをしっかりと押さえる」では58.6%、「学校間、教員間の引継ぎをしっかりと行う」では62%、「関係機関等とのネットワークをつくる」では62%の教師が肯定的な回答をした。これに対し、「個別指導計画との関係を明確にする」と肯定的に回答した教師の割合は41.3%であった。ここには、約20ポイントの差が見られた。

(3) 実践研究

授業観察の結果から、B生徒ができるだけ一人でできる状況を目指し、「不安を招くことがないようにすること」、「学習への興味や関心を高めていくこと」、「成功体験を積み重ねていくこと」に指導上の配慮を必要とする現状であることが分かった。そこで、この結果を基に、B生徒の実態に則し支援の段階が進むにつれB生徒自ら考える場が増すことを意図し、指導の手だてを指導段階表としてまとめ整理した。

表の横軸は、基本的な指導のねらいとした。また、縦軸に示す支援の1段階は「教師との関わりを基礎に、経験を重ねることで取り組める」、2段階は「教師の意図した教材や教具等の働き掛けにより取り組める」、3段階は「周囲から読み取った必要な情報を基に取り組める」とした。そして、これをより具体化し作成した指導段階表を活用し、B生徒の行動の変容を追ったところ、次に示す結果となった。

主に、第4時では、指導のねらいを1段階の参加と活動に焦点を当てた、くるくる棒を作ること及び籠編みをする事とした。ここでは、授業の進行に伴い、指導の段階のとおりに進んだ様子が見られた。第5時では、第4時の結果を基に、より高い指導のねらいの2段階を設定した。しかし、籠編みをする事では、指導のねらいを確実に達成できなかった。

4 研究の考察

(1) 基礎研究

ア 教育的ニーズの定義

本研究では、各種文献を参考に教育的ニーズとは、「障害があることによって遭遇する制約や困難を改善・克服し豊かな生活が送れるように、教育、医療、福祉、労働の分野から見た必要なもの」と定義した。

イ ICFの視点を踏まえた学習の参加と活動

ICFの提言は、「生活行為といった活動が活発になると、精神の働きや視覚、聴覚といった機能は回復し、物事への関わりといった参加が進むと、活動や機能も軽快する」、「障害のある人の願いや、思いを達成させるために周囲の意識といった環境因子や価値観といった個人因子をできるだけプラスにすることで、生活機能は一層向上する」という考えである。本研究では、この考えを踏まえ、学習の参加と活動に焦点を当て、取組を行うこととした。

ウ 障害のある児童・生徒の学習指導

文献調査の結果から、授業において、「指導のねらいは、児童・生徒の具体的な実現状況を想定し作成する」、「児童・生徒に応じた指導の手だてを講じる」、「評価は、きめ細かに行うために、一単位時間ごとに実施する」ことが前提となることが分かった。

(2) 調査研究

担任教師は、個別の教育支援計画を踏まえ、教育的ニーズに応じ、指導の目標や方法をまとめた個別指導計画を授業に生かしていくことに、課題意識を抱えていることが分かった。この理由として、本研究からは、児童・生徒の病気の状態が変わりやすいことによる実態把握の難しさが考えられた。

(3) 実践研究

第4時の結果からは、教師と一緒にいること等を通し指導のねらいを達成したと考えられた。また、実際に参加し活動する姿勢の評価は指導段階表に含まれB生徒の指導のねらいの達成の規準となっていた。そして、第5時の結果から教師がB生徒のより近くで言葉掛け等を行うことが中心となったが自ら製作に参加し活動する姿勢は評価することができた。

5 今後の展望

研究成果として、ICFの視点を踏まえた学習の参加と活動に焦点を当てた指導段階表は、B生徒の状態を的確に捉え、支援の一方策として、有効であることが分かった。一方、課題として、教科等を担任する教師の中には、「全ての生徒において、毎時間の指導で続けることは難しい」といった指摘もあった。

今後は、本研究で得られた成果や課題を基に、学校の教育活動全体を通して、教員間の連携の下、指導段階表のより実践的な活用について究明していく。

